

2015年度 大学院奨励研究員研究報告書

研究科委員長印

印

2016年 3月 31日

関西学院大学学長 殿

奨励研究員

氏名	山本 歩	印
----	------	---

指導教員

所属・職名	文学部・教授	
氏名	細川 正義	印

以下のとおり、報告いたします。

研究課題	田山花袋の小説と〈小説作法〉の研究 —「文章世界」時代を中心に—
採用期間	2015年 4月 1日 ~ 2016年 3月 31日

研究科受付印

教務機構受付印

提出先： 教務機構事務部

研究発表状況（奨励研究員採用期間内に発表したものおよび、近く発表予定のもの）

(1) 学会誌等への発表（著者、発表論文名、学会誌名、巻号、発表年月、掲載頁等）

雑誌論文	著者名	山本歩	論文題目	加藤武雄『悩ましき春』考——加藤武雄の「文章世界」体験として		
	雑誌名	『阪神近代文学研究』		巻号	発行年月	掲載頁
				16号	2015年5月	32-46

雑誌論文	著者名	山本歩	論文題目	田山花袋『蒲団』における「基督教信者」表象		
	雑誌名	『キリスト教文学研究』		巻号	発行年月	掲載頁
				32号	2015年5月	75-87

図書	著者名		論文題目			
	書名				発行年月	頁
						総頁：
	担当箇所：					

※論文題目：共著の場合の担当部分のタイトル

(2) 学会発表（口頭・ポスター：学会名、開催地、発表論文名、発表年月日等）

学会名	日本近代文学学会関西支部	開催地	武庫川女子大学
題目	「文章世界」の小説指導 ——田山花袋編『二十二篇』に見るその傾向——	発表年月日	2015年6月10日

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

研究経過状況（3000字程度）

2015年度は大学院奨励研究員として採用され、学位請求論文を提出した。田山花袋の小説作品、雑誌上の言説を取り扱い、彼の創作技術の在り方と、同時代における役割を考察した。

今年度はとりわけ、雑誌「文章世界」における小説の指導・選評の総括を行った。結果として花袋の誌上の小説指導が、①ローカルカラー（地方特色）、②人生、③観察描写、といったキーワードのもと連動していることが明らかとなった。それらは読者層が既に表明していた地方生活への不満をフィードバックしたものであり、従って花袋の位置づけが読者に自己慰藉を与えるものであったことがわかる。こうした研究結果を2015年6月、日本近代文学学会関西支部の大会において「「文章世界」の小説指導——田山花袋編『二十二篇』に見るその傾向——」として発表したのが、特筆すべき業績であろう。発表内容は改めて、書き下ろしとして博士論文に収録した。

その他、三上於菟吉・中村武羅夫といった、「文章世界」読者層の回想（三上『随筆わが漂泊』）や評論文（中村『誰だ？ 花園を荒らす者は！』）等を参照することで、青年たちを文壇へ駆り立てる誘惑装置としての花袋および「文章世界」の位置を確認することができた。

研究結果をまとめ、以下のように結論を導き出した。

花袋の文芸作品、そして小説指導について考察した時、そこに浮かび上がってきたのは、排技巧の主張によって見られにくくなった、花袋の小説技術であった。一方、その雑誌編集活動は、青年を強く誘惑するものであった。両側面において、〈像〉をめぐる駆け引きが見られる。花袋はマスメディアが作り出す〈像〉を受け、それを利用して『少女病』や『白紙』を創作した。あるいは他者を一定の〈像〉に閉じ込め、送り手としてそれを利用する。〈像〉の造成を可能にするものが技術であり、またメディアなのである。従って花袋の文芸活動を、〈像〉をめぐる駆け引きと見る観点において、技巧の存在は看過出来ない。花袋にもまた、戦略は存在し、技巧は存在したのだ。

また、「文章世界」という場にフォーカスを当てれば、花袋は一個の装置であった。花袋という〈像〉は青年たちを誘惑し、文学への関心を抱かせると共に、文学へと拘束した。自然主義と青春時代を、パラレルに経験した加藤・三上・中村の世代は、共に極めて積極的な文学者であった。その他、多くの名もない青年たちが、この時期、小説を〈書く〉ことに邁進した事実は重い。『田舎教師』予告記事や、小説指導を眺めれば、そこには確かに誘惑の機構が見出せるし、『悩ましき春』はそれを傍証している。〈田山花袋〉という名前は、その機構の中心に常に存在していた。「文章世界」と地方青年が作る「寂しさ」の増幅回路の中心点、それが明治40年代における、田山花袋の位置である。

なお、学位請求論文の目次は以下の通り、全4部12章である。

【序論】

第1部 【明治40年の主人公たち】

第1章 『少女病』における杉田〈像〉——メディアイメージとの暗闘

第2章 『少女病』——「あくがれ」る精神／復権する肉体

第3章 『蒲団』における「基督教信者」表象

第2部 【〈像〉の送受信】

第1章 特異な短編——『白紙』および『不安』

第2章 『田舎教師』予告的記述に関する考察

第3章 『田舎教師』——対等と懸隔のはざままで

第3部 【小説作法の研究】

第1章 『小説作法』の特徴——「忍耐と修練」を中心に

第2章 『二十二篇』に見る小説指導

第3章 小説作法における「科学」／「宗教」の問題

第4部 【青年たちの「文章世界」】

第1章 加藤武雄の青春——『悩ましき春』考

第2章 三上於菟吉の礼讃——マルチプルへの評価

第3章 中村武羅夫の反逆——「文章世界」体験と通俗小説論

【結論】

1000字詰300頁を越える分量であり、内容的にも力作として、試問においては評価された（なお、試問は関西学院大学の細川正義・大橋毅彦両教授に加え、京都大学の須田千里教授にご担当いただいた）。しかし課題も多く、とりわけ作品読解の方法、理論操作の粗については指摘を受けた。こうした課題をブラッシュアップし、書籍化を目指していく。

外部の研究会にもお誘いいただき、視野を広げる機会を得た。「日本のフィクション研究会」ではサール、ジュネット等の海外文学理論、中村三春氏の最新の理論実践を読書会の形で学ぶことが出来、そうした経験は博士論文執筆の際にも有益に働いた。

奨励資金に助けられ、全体として滞りなく研究を進めることが出来た。資金獲得により時間的余裕が生まれたことが大きく、論文執筆に注力することが出来た。学位請求論文は11月に提出し、審査会を経て承認され、3月には学位を取得することが出来た。奨励制度に感謝したい。

今後は、博士論文において扱った「小説の書き方」言説の意義を敷衍すべく、「近代の〈小説作法〉の研究」を予定している（小説の書き方を指南する言説を扱い、それらの戦略性——小説に対する規制、リテラシー形成の目論み——を看取する。従来「ハウツー本」として軽視されてきた資料を読み直し、小説文化の周縁を探ることを目的とする）。とりわけ、今年度の研究で収集・活用した資料が大きな役割を果たすと考えられ、その意味でも今年度の研究は実り多いものであった。

以 上